
しりとり

N澤巧 T 郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しりとり

【Nコード】

N7497H

【作者名】

N澤巧T郎

【あらすじ】

仲良し4人組が、あまりにも暇なので『しりとり』を始めた。

はじまり

放課後、4人はいつものように教室にいた。

過去の事も、最近の出来事も、散々しゃべってきた4人には、もう話す話題がなく、さきほどから無言の時間をすごしていた。

窓の外からは、部活動に汗を流す人々の声が絶え間なく聞こえてくる。

あまりにも暇だったせいだろう。

シヨウタが突拍子もない提案をした。

「しりとりでもするか」

カキーンと、野球部が金属バットでボールを打った音が、教室の中に響き渡った。

四拍ほど置き、トモキが「えー？」と、あからさまな拒絶反応を見せた。

一方、リュウセイはというと、まるでなにも聞かなかったかのように見当違いの方向を眺め続け、何の反応も示そうとしない。

シヨウタも別に本当にしりとりがしたかったわけではなく、この無言空間を打破するために発言しただけなので、拒否されようが無視されようが気にしていなかった。

その証拠に、シヨウタはすでにどうやってしりとり賛同してもらおうかとは考えておらず、次になんの話をしようかと頭をめぐらせていた。

その時だった。

今まで黙っていたリクがおもむろに口を開いた。

「じゃ、しりとりの”り”からね。りんご」

トモキは驚いている。

リュウセイは静かに視線だけをリクの方へと向けた。

提案者のシヨウタでさえ、あまりに予想外の出来事が起きたせいで、言葉を失っていた。

カキーン

その音を聞いたシヨウタは、ハッと意識を回復させ、すぐさまトモキに向かい「ほら”ご”だよ”ご”」と、催促した。

「え？やるの？」と、戸惑いを見せながら、トモキはチラッと同意を求められるかもしれないと思い、リュウセイのほうを見た。

しかし、リュウセイはいつものようにどこかそっぽを向いて黙っていたので、トモキはあきらめ、「ご？ん」。じゃあ、ゴリ

「ラッコ」

「早っ。まだオレ言い終わってないんですけど。すげえやる気満々じゃねえか」

リュウセイはトモキのゴを聞いた時点で、ゴリラと言ったことがわかり、すぐさまラッコと発言したのだった。

続いてシヨウタの番。

「じゃあ俺か。ええとね。ご、ご、ご、ごマ」

それを聞いたリクは、「マ………」と、つぶやいたかと思う

と、微動だにしなくなっていました。

トモキが心配になってリクの背中に目を向けた。
ゼンマイでもあるんじゃないかと思ったからだ。

そんな心配をよそに、リクは何事もなかったかのように言った。

「摩擦係数測定器」

「そんなんあのかよ」と、すぐさまトモキが反応する。

リクは「さあ？」と首を傾げる。

「知らねえのに言っちゃた？完全に思いつきじゃねえか」

いつものようにつかかるトモキに対し、シヨウタが「まあ、別になくてもいいでしょ。なんかあるっぽい感じなら」と、いつものようにさとした。

「あるよ」

いきなりリュウセイが、つぶやくように意見を述べた。

「え？ホントにあんの？まさか？」と、トモキが疑いのまなざしを向ける。

するとリュウセイは先ほどと同じ口調で「180万」と、商品の値段を告げた。

「高っ！？自動車並みじゃねえか」と、トモキは驚き、続けて「ってか、ホントか？何で知ってんだよ」と、リュウセイに対して再び疑いのまなざしを向ける。

「調べりゃわかる」と、リュウセイはまったく相手にしていない様子だ。

「ほら、”き”だよ”き”」

シヨウタがトモキに向かってしりとりを続けるように促した。

トモキは「わーったよ」という雰囲気をかもし出しながら「”きねえ”と考え始めた。

「じゃあねえ、救急自転車」

「自転車かよ」と、シヨウタがすぐに食いついた。

続いてリクが「急いでるなら自動車を使わなきゃ」と、注意する。

「患者はどうすんだ？」と、リュウセイが質問すると、トモキは「え？そりゃ後ろの、子供を乗せるところに」

「ただのママチャリじゃん」と、リュウセイが的確なツツコミを入れる。

それを聞いてシヨウタが「たしかに」と、同意した。

「じゃあ次ね。あ、”しゃ”と”や”、どっちにしようか」と、シヨウタが尋ねた。

すると「どっちでもよくね？」と、トモキがてきとくに答えた。

その答えを聞いてシヨウタは「じゃあどっちでも言いや、好きなほう選んで」と、リュウセイに任せた。

リュウセイはまったく考えることなく、すぐさま答えた。

「車間距離不保持違反取締装置」

「やたら長えっ！！」

トモキが驚く。

「いったい何のことなのかわからない」

シヨウタが困惑する。

「噛まないで言えたことがすごい」

リクが感心した。

「通称ホークアイ」

「やっぱり実在すんの？　いったい何なんだよソレ」

「調べりゃわかる」

リュウセイのいつもの返しが出たところで、シヨウタは「ち”ね。ち、ち、ち」と、シヨックを受けているトモキをほっといてしりとりを再開させた。

「ち、ち、ええ、超能力開発用右脳活性化カセットテープ」

まずはトモキから。

「パチくせえ。ってか完全にパチだ」

続いてリク。

「せめてCDに焼きなおして欲しいね」

そして、リュウセイが「いくら？」と質問した。

「今ならなんと、この左脳活性化カセットテープをセットで購入すると、もれなく全員に、脳全体活性化DVDをプレゼント!!」

「最後のがあれば、ほかの必要ねえだろ」と、リュウセイ。

「コレだけ揃ってイチキーパーの1万908円。1万908円でのご提供です」

「完全にボツタクリじゃねえか!!　高いにもほどがあるぞ」

「8円くらいどうにかできなかったの？　2円足して910円にくれたほうがまだマシだよ」

やはり最後はリュウセイが的確なコメントで閉めるのだった。

「まずはお前らが活性化しろよ」

はじまり（後書き）

今回のしりとり。

しりとり リンゴ ゴリラ ラッコ コマ 摩擦係数測定器 救急
自転車 車間距離不保持違反取締装置 超能力開発用右脳活性化力
セットテープ

リピート(前書き)

前回のしりとり。

しりとり リンゴ ゴリラ ラッコ コマ 摩擦係数測定器 救急
自転車 車間距離不保持違反取締装置 超能力開発用右脳活性化力
セットテープ

レポート

「次は”ぷ”だぞ”ぷ」と、シヨウタがリクに向かって言った。リクは「じゃあねえ」と、左上を見ながらつぶやくと、今度は深く考えることなく発言した。

「プチ整形キット」

「ぜってえあぶねえじゃねえか。整形外科なんて素人が手をだしちゃダメだろ」

すでにおなじみ、トモキの『じゃねえか』ツツコミが飛び出した。続いてシヨウタ。

「韓国から輸入したっぽいよなあ。あっちじゃ流行ってるみたいだし」

「内容は？」と、いつものようにリュウセイが掘り下げる。

「注射器でしょ。麻酔も必要。あとは……クエン酸？」

「健康にはいいけどな。あんまプチ整形じゃ聞かねえぞ。ヒアルロン酸ならシワ取るのに使うけど」

リュウセイがそういうと、リクはすぐに反応して、「ああ、それぞれ。間違えた。」と、訂正した。

シヨウタが「ほかには？」と、質問した。

「あとは、ほら、あの、ボツリヌス菌？」

またまた疑問符が出たところで、リュウセイが再び「ボツリヌス菌は自然界最強の毒素をもってたぞ？」と、コメントする。それを聞いたトモキが気が付いた。

「細菌兵器じゃねえか！！プチとかかわいい響きをつけてる場合じゃねえ」

プチがかわいいかどうかはさておき、リクが言った。

「あれ？なんかボツリヌス菌を注射するとどうにかって言ってたなかった？」

どうなんですかリュウセイ先生？

「ボトックスのことな」

「ああ、それだそれ。たぶん」

「ボトックスってなに？ボツリヌス菌に関係あんのか？」と、トモキが質問した。

リュウセイは「ボトックスってのは、ボツリヌス菌の毒素から抽出した成分で」と、言ったところでいったん動きを止めると、大きく息を一回吐き出してから「調べりやわかる」と、めんどくさそうに言った。

コレが出ちゃったら、もう何を聞いても答えてくれないと知っているトモキは、自分から聞くのをやめにして、「”と”か。ええつ」と、自分からしりとりを再開させた。

「じゃあ、トマト皮むき機」

「え？もしかしてトマト専用？」と、シヨウタが確認すると、トモキは「あたりめえじねえか」と、すぐに答えた。

「普通の皮むき機しか想像できないね。てか、普通の方が万能だよ。ね。もちろんトマトもむけるもんね」と、リク。

「いいんだよ。もうトウルって剥けるから。驚くほどキレイに剥けるから」と、トモキがジエスチャー付きで有効性を説明する。

次はいつものようにリュウセイの番だが、このリュウセイの発言が3人を驚愕させることになる。

「キュウイ皮むき機」

「え？もしかして次、言っちゃった！？」と、リクが確認する。
「しかもパクリじゃねえか！！皮むき機はオレの発明だぞ！！」と、
トモキが反発する。

シヨウタはあまりに予想外の出来事だったため、口を半開きにして
固まっている。

そしてリュウセイはいつものテンションで「こう、トゥルつと」と
言いながらジェスチャーをつけた。

「そのトゥルつもオレのじゃねえか！！皮むき機なんて使わないで
スプーンで中をくり抜いとけ！！」と、トモキが違う方法を提案し
た。

すると、先ほどもまで固まっていたシヨウタが目を覚ました。

「きゅうり皮むき機」

「パクリ反対！！皮むき機に権利を！！」と、トモキがわけのわか
らない権利を主張しだした。

トモキのテンションはあがりまくっている。

「こう、トゥルつと」

「奇跡じゃねえか！！きゅうりでソレが出来たら奇跡だぞ！！つて
か俺も見てみてえ！！つてかパクるなつつの！！トゥルには著作権
が発生してんだぞ！！死後50年有効だかな！！」

トモキのテンションは最高潮に達していた。

「そんなに皮むき機で熱くなるなよ」と、シヨウタがトモキを落ち
着かせようとする。

いまだに顔を真っ赤にしているトモキを見て、シヨウタは続けて「
もう皮むき機は使わないから、な。」と、説得した。

「な、なら、いいけどさ」と、いまだ少し興奮気味に了解するトモ

キ。

そんなやり取りを、ほんの少し微笑みを浮かべながら眺めていた、この騒動の張本人でもあるリュウセイが「じゃ、次」と、リクへとバトンを渡した。

「ああ、ええ、救急三輪車」

「オレのじゃねえか！！！！救急もオレの！！！！」

再びテンションが最高潮に達したトモキをよそに、今度はショウタが「よけい遅い乗り物になっちゃったよ」と、指摘した。

トモキのテンションが落ちる気配はないが、やはりリュウセイが冷静に的確なコメントを言っつて、また次回なのである。

「キツザニアにもねえよ」

リポート(後書き)

今回のしりと。

プチ整形キット トマト皮むき機 キュウイ皮むき機 きゅうり皮
むき機 救急三輪車

トモキ復活（前書き）

前回のしりとり。

プチ整形キット トマト皮むき機 キュウイ皮むき機 きゅうり皮
むき機 救急三輪車

トモキ復活

「うおい！オマエの番だって」

シヨウタがトモキに語りかけても、トモキは机に突っ伏したまま起き上がろうとしない。

「ヘッ。もうしりとりなんていいよ。みんなパクるし」

トモキは完全にいじけていた。

自分で考えた言葉が、みんなに良いように流用されてしまい、それがトモキに大事なおもちゃを取られてしまったような感覚を思い出させていた。

いの一番にトモキの言葉をかつぱったのはリュウセイだ。

そのリュウセイはというと、我、関せずという意味を表すように、どこか見当違いの方を眺めている。

しかし、その顔には若干の楽しさが滲み出ていた。

「だって、トモキがおもしろいから」

リクがあっけらかんと言いつつ放った。

トモキの体がピクツと反応を示した。その反応をシヨウタは見逃さない。

「そうだよなあ、まさかあそこで皮むき機だもんな。さすがだよな。発想が違うよね。なんていうんだろうね、神のお告げとでも言っているくらい、こう、悟りを開かされたっていうのかな。そのくらい笑撃的だったよね」

シヨウタは自分でも何を言っているのかさっぱりになりながらも、
トモキが勘違いしそうな単語を並べ立てた。
リュウセイは見逃さなかった。

突っ伏しているトモキのかすかに見える横顔から、にやりと伸びた
口元を。

「じゃあ、オマエ負けで、俺が続けるからな。しゃ」

次の瞬間、トモキが飛び起き絶叫した。

「シャンプー＆リンス＆漂白剤！！」

シヨウタは待つてましたと言わんばかりに呼応した。

「絶対肌に悪いだろ！！髪真っ白になっちゃうから！！」

トモキが続けて効能を語った。

「美白効果抜群」

対してリクが思ったことを素直に口にした。

「漂白と美白はちがうんじゃない？危険な匂いがぶんぶんするよ。
あの漂白剤独特の匂いがぶんぶんするよ」

トモキが使い方を説明する。

「お風呂に入るときは夕食後のお皿も一緒に持ってっちゃう。そん
で、頭を洗うついでにお皿もささっと洗って、湯船に自分と一緒に
つけておくだけで、あら不思議。真っ白綺麗」

そして最後はいつものようにリュウセイの番だが、やはりというかさすがというか、やっぱりリュウセイはどこか違う視点を持っているのであった。

「食べ終わった後、台所で皿洗うついでに髪洗ってもいいよな」

トモキ復活（後書き）

今回のしりとり。

シャンプー&リンス&漂白剤

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7497h/>

しりとり

2010年12月12日14時37分発行